
腐女子な私と無愛想な君の、恋愛模様。

万華鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

腐女子な私と無愛想な君の、恋愛模様。

【Nコード】

N4240Z

【作者名】

万華鏡

【あらすじ】

道崎音姫は学園でも結構有名な腐女子ちゃん。そんな彼女には最近・・・というかいつの間にか気になる人ができていた。その名も宮崎智聡君。入学当初の自己紹介で声を聴いて「何これイケボ!!!」とか思い無愛想で素っ気ない彼に諦めることなく話しかけ続けているうちに、徐々に彼自身のこと好きになってしまっていました。

そんな腐女子な彼女と無愛想な彼の恋物語

わたしの好きなもの

甘いもの、かわいいもの。

・・・マンガ、ゲーム、声優さん、同人誌

BL。

わたしの将来の夢

BLをもっと世に広めること

名前：道崎音姫
みちのさき おとめ

「音姫ーこれ見てみてー!!」

「うん?・・・っおお!こ、これは・・・!!」

教室に響き渡る大音量。

「え、え!?こんなところで売ってたのっ!?!」

「んーつとねえ・・・秘密」

「えええ!!!?ずっるいつ!!!教えてって!!」

「しょうがないなあ・・・実はね・・・」
「ふむふむ・・・」

煩いと思っていたら、急に静かになった教室。

「ふーいいこと聞いちゃった！あ、宮崎君おはよー。」
「・・・お早う。」

でもやっぱり最後にはうるさくなる。

それが私、道崎音姫。

「あーダメダメ！もつとちゃんと言ってくれなきゃ！！せつかくのイケメンボイスなのに。」

「・・・あ、そう・・・」

私の隣の席の宮崎君。低音のすつごいイケメンボイスで、彼の声を聞いた瞬間その声に惚れてしまった。私の日課の一つに『学校のある日は一回は絶対に宮崎君の声を聴く！』なんてものが追加されたくらいには。

でもこれがなかなか難しいんだよね。宮崎君、あんまし喋ってくれないし、それなら友達と話しているときに声を聴こうと思ってもまず第一に人と話すことが極端に少ない。いつも詰まんなさそうな顔してるんだ。そこも魅力的なんだけど。声とマツチしてて。

「宮崎君もつと喋ってよー！！」

「・・・なんで。」

「聴きたいからっ！！」

「・・・」

ありゃりゃ、向こう向いちゃった。でもこれはもはや日常茶飯事な

ので、これくらいのことでは挫けません！と、心の奥底でしょんぼりしながらも自分を勇気づける。

そりゃあ、最初は声があまりにも素敵でかつこよかったから話しかけてただけなだけどさ。・・・そうしていた内に、いつの間にか彼に惚れてた。

私の人生すべてBLにささげると誓ったのになー。もちろんBLが好きなのは今でも変わってないし、これからも変わっていく予定なんて無いけどね。あ、私自他ともに認める腐女子です。でも(口)喧嘩は強い方だから、いじめになんて負けないよー。と言っても、前に喧嘩吹っかけられたとき(口で)コテンパンにしてから誰も何も言わなくなっただけどね。もしかして私ってば最強？

「音姫、次英語だけど課題やった？」

「ああっ！やってない！！」

「あたしもだよー。」

因みに今の時間は自習。先生もいないから、皆遊びたい放題やりたいたい放題。私は、ぱぱーっと英語の課題をやることにした。

「ってことで宮崎君見せてー。」

「自分でやれ。」

容赦のないツッコミが返ってきた。いや、ツッコミじゃないか。でも、あきらめない。こういう展開はちあんすなんだ！覚悟しろよ宮崎ー！！

「見せて見せて見せてーっ！！」

「・・・・・・はあ。ほら。」

「わあ、ありがとー。ついでに教えてー！！」

「・・・・・・。」

宮崎君は意外と押しに弱い。文句を言いながらも、なんやかんやで結局は優しいんだ。そんなところも大好き。
一番好きなところは声だけだね。

「・・・道崎。」

「はいっ？つて、うわっ先生なんで!？」

宮崎君に教えてもらいながら課題をやっていたら、なぜかいつの間にか後ろに先生がいた。しかも課題を提出しなければいけない英語の先生。結構若い。だからか生徒から甘く見られがち。
なんでこんなところに・・・？と驚いていると、先生はその答えと共に新たに鬼畜な課題を強制提供してきた。

「・・・なんで俺まで。」

「じゅめんよー。」

宮崎君を巻き込んで。私的には宮崎君と二人きりになれたことがうれしいのでノープロブレム。むしろありがとう先生!!
ん、反省？何それおいしいの？な私はうきつき気分で空き教室の掃除を宮崎君と共にやっていた。

ろくに返事ももらえないが、めげずに宮崎君に話しかける。若干痛い子になってしまっているが、いつものことだから気にしません！何分かそうしているうちに、悲惨な状況だった空き教室は結構見れるような状態になっていった。

「ふう、これくらいでいいかな？」

「・・・いいんじゃないの。」

「私としてはもう少しやっていたかったんだけどなあ。」

「・・・なんで。」

「え、そんなの決まってるよ！宮崎君と一緒にいられるから！！」

冗談のように言っているけど、これは本気。本当の私の気持ち。今までリア充目の前でいちゃいちゃすんなどか思ってたけど、それは今は考えない。

それに、よく考えたらBLを生んだ人だってリア充さん達みたいなものだよね。世の中リア充がいないと人間がいなくなっちゃうからね。

・・・と、話がそれちゃった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

というか宮崎君ノーリアクションなんだけど。あ、いつもの事が。

「みーやーさーきーく〜ん・・・？」

「・・・お前は、」

あ、喋った。と思ったらまた止まってしまった。何かを考え込むような顔をしている。いったい何言われるんだろう？と内心ドキドキしながらも宮崎君の言葉の続きを辛抱強く待っていたら、数分してやっと再度口を開いた。

「なんで、俺に話しかけてくるんだ？」

「え、声が好きだから？」

「……………」

あ、今の言い方語弊があったかな。なんか声だけが目的みたい。

「もちろん宮崎君自身のことも好きだよー。」

「どつちの意味で。」

「え?」

「だからどつちの意味で。」

「うえ〜…………?」

なんか今日の宮崎君はよく喋るなーと思っっていたら、そんなことを言われた。突然で最初なにを言われたのか分からなかったけど……ドッチノイミデ…………所謂likeかloveかってこと、ですか…………?

「…………返答次第では許さないから。」

「えええええ〜っとお……………」

えーなんか脅しかけられちゃったよー。らぶの意味でって言ったら殴られ…………はしないか。宮崎君無愛想だけど優しいし。

「えーっ…………す、好きだよ?ホントに。」

「…………それは愛してるってこと?」

「う、うん。」

ナニコレ恥ずかしいっ!!BL大好きとか教室で大声で言えるくらいだから私に羞恥心なんてあるのかとか自分でも思ってたけどこれは恥ずかしい!恥ずかしすぎて死にそうだよー(泣)

「…………ホント、なんでだろな。」

とてつもなく低くなつた宮崎君の声に、すこしだけびくりと体が反応した。どうしよう。めっちゃ怖い。もう話しかけないでと言われたらどうしよう。彼女さんいるとか言われちゃったらどうしよう……？

なんだかすごく不安になつてきてしまった私は、ついに再度きた沈黙に耐え切れなくなつて俯いてしまった。

「顔あげるよ。」

「……っ！？」

不意に耳の傍から聞こえてきた宮崎君の惱殺ボイス。びっくりして思わず宮崎君の言つとおり顔を上げてしまった。

「うつ、え……？」

「……道崎……。」

「みみみ宮崎君っ！？」

「動くなつて……。」

そうして妖しく微笑む宮崎君。というか慣れていらっしやる！？キヤラ違くない？

とか思っているうちに宮崎君の唇が私のそれに落ちてきた。

「くっ、んう……！！」

「……はっ……。」

「みっ……みやさき、く……。」

「智聡。」

「……っえ……っ？」

「智聡って呼べ。」

「ち、さと……っ？」

「そう。」

「なななななにながっ!?ど、どうなって・・・!?え、えっ?・・・
えええ!?!」

「ワタシハコンランシタ。」

「みみ、みやっ、宮崎君!?え。なんで!?!」

「・・・不本意だけど、」

「えっ、え?」

「好きだ。」

「はああ!?!う、嘘っ。」

「嘘なわけないだろ。」

「え、う・・・ええ?」

突然の告白にわけがわからず、変わらず混乱し続けていると宮崎君はさらに言葉をつづけた。

「・・・最初は、本当に面倒な奴だと思った。」

「えっ?」

「馬鹿だしうるさい落ち着きないし煩わしかった。」

「え、ちょ、」

「でもいくら素っ気なくしても無視しても道崎だけは俺に話しかけてきて・・・それが、いつの間にか少しだけ嬉しく感じるようになったきたんだ。」

「・・・。。。。。。。」

そうやっていつもの姿からは想像もできないくらい能弁になった宮崎君の言葉に、だんだん混乱するのを通り越して赤面していく自分の姿が容易に想像できた。心なしか、宮崎君も若干顔が赤い気がする。

「……んで、いつの間にか好きになってた。こんなはずじゃなかったのにな……。」

「みやさき、くん……。」

なんか、すごく突然で。

すごく、驚いて。

言葉にできないほどうれしかった。

「す、すきっ、わたしも！宮崎君が好きだよっ！！」

気づいたら、恥ずかしげもなくそんな言葉を言っていた。

「……ああ。」

そしたら宮崎君もいつも通りに返事をしてくれて、私たちは、晴れて恋人になった。

私、今の今まで非リア充ー！とか言ってたのにな……。
なんて思いながらも、やっぱり幸せな私でした。

わたしのすきなもの

B L。 甘いもの。かわいいもの。マンガ、ゲーム、声優さん、同人誌、

宮崎君。

わたしの将来の夢

BLをもっと世に広めること。それと・・・

宮崎君とこれからずっと一緒に幸せに生きていくこと

道崎 音姫

(後書き)

・・・あれ。宮崎君性格変わった・・・？

とか思いながらも今更書き換えるのは面倒だとおもった自分でした

(笑)

間違い等見つけられた方は報告してくださいと幸いです>><

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4240z/>

腐女子な私と無愛想な君の、恋愛模様。

2011年12月14日19時49分発行